

海を渡った浄高生

平成十六年四月〜平成二十五年三月在職
現岩手県立花巻南高等学校教諭

須藤友子



「浄法寺高校」から「浄法寺校」へと移り変わる時を含む、計九年間お世話になりました。平成十六年、転勤した直後に「水がきれいな場所の子どもは良い」と同僚に言われました。その言葉通り、人懐っこく、ひたむきな生徒と多く出会うことができました。また、生徒の数だけ、保護者の方とも出会った訳ですが、大らかでたくましい方々ばかりで、若かった自分は、時に発破をかけられ、励まされもしたものでした。PTA活動では整備と一緒に汗を流し、自慢の手調理を振る舞って頂きました。生徒とも、保護者の方とも、距離が近い。これが、浄法寺の良さなのだと思います。

す。もちろん、距離が近ければぶつかること、言いにくいことも多く、不都合な場合もあります。お互いの顔がはっきりと見え、問題を人任せにせず、皆でやろうとする雰囲気があるのは学校にとって幸せだったと、しみじみ思います。

さて、記憶に残る思い出、浄法寺高校時代では、何と言ってもハワイ修学旅行です。転勤して来て初めて三年間担任した学年でした。最後の二クラス編成の学年だったと思います。伝統を誇る相撲部に、沿岸から生徒が集まり、校内に百キロ級の力士が闊歩していた時代。相撲だけではなく、ハワイの修学旅行を目標に入学してきた者もいました。のんびりとした中に、虎視眈々とやってやるぞの気概を持った生徒がいて、本当に面白かった。中学の修学旅行で初めて東京に行っただけに、一気にハードルが上がり、次は海外、ハワイ。戸惑う生徒、親御さんも多くいました。山積する海外への不安と、原油価格の高騰による燃料チャージの値上げ。心配は最後まで尽きませんでした。それでも、生徒は初めての海外旅行に壮大な期待を膨らませ、カフク高校との交流で披露するソーラン節の練習に励みました。そして、見事に海を渡り、現地の高校生との交流を成功させました。代表生徒のスピーチは堂々として素晴らしく、交流の記念として製作した「以心伝心」と書いた大旗

を贈呈しました。普段内気で何も話すことのない生徒が、現地の高校生とペアになり片言の英語を交わし、フラダンスを教えてもらう。椰子の木がある広場で踊ったソーラン節は、現地の高校生を魅了しました。何と多くの初体験をし、刺激の渦に自分たちを置いたことか。さらに生徒たちは、市内での自主研修も体験し、教員の心配を余所に、英語が通じた通じないと騒ぎながら、達成感に満ちた顔でホテルに戻ってきたのでした。何事も越えて見なければわからないものだと思えたハワイ修学旅行でした。

浄法寺は「小さくともキラリと光る学校」というキャッチフレーズを長く掲げてきました。やんちゃな生徒ももちろんいましたが、いつの時代も、未だ磨かれていない様々な力を秘めた生徒たちが、学校を面白くしていたと思います。

小さいからこそ、自分たちが自ら行動する。小さいからこそ、互いを思いやる。そんな精神が脈々と流れた学校で、私自身、他では得られない多くの経験をさせて頂きました。改めて心から感謝申し上げます。ここで育てて頂いた者として、これからも、その精神を忘れずにいきたいと思えます。

かけがえのない 六年間を過ごして

平成二十年四月〜平成二十五年三月在職
現岩手県立一関第一高等学校教諭

伊 藤 崇



分校初年度の平成二十年度から、平成二十五年までの六年間、浄法寺校で勤務させて頂きました。

思い出は語り尽くせませんが、私が関わったエピソードを学校行事と部活動の二つの観点から記します。

まずは、学校行事です。分校として、生徒数の減少に伴う学校行事の存続は大きな課題でした。特にも、体育祭・文化祭の二大行事は、頭を悩ませました。チーム数が年々減る体育祭、そこから生まれたのが、全校生徒による「集団行動演技」でした。創意工夫と一体感で魅力ある演技を目指し、体育の授業を中心に、

細部までこだわり練習しました。また、文化祭では模擬店等が難しい状況になる中、「浄法寺さんさ」「浄法寺太鼓」を地域のお祭りで発表するという形で実施しました。地域の圓子さん小船さんを指導者としてお招きし、真夏に汗をかきながら熱心にご指導頂きました。これらの発表は、観ている方々に大きな感動を与え、浄法寺生一人一人が主役として輝いた瞬間だったと考えています。

部活動では、部員不足に悩み、部の統廃合など課題が山積しました。それでも、与えられた環境の中で、目標を掲げ、真摯に自分と向き合い努力する浄法寺生の姿から、私は「あきらめない気持ち」を学びました。硬式野球部顧問としても、かけがえのない時間を過ごすことができました。分校として初めて望んだ夏の選手権大会は開会式後の開幕試合、全校応援の中、見事五回コールドで分校初勝利をもたらしました。また、「分校日本一」を掲げ、和歌山県の強豪校、日高高校中津分校を訪れて練習試合、花巻東高校が春の選抜大会で決勝進出を決めた歴史的な瞬間に遭遇した甲子園見学、様々な支援により関西遠征が実施できました。部員が少なくなった後も、助っ人部員を入れての大会奮闘、最後の部員である久慈孝弘君は、一人部員として三年間野球を続け、始球式のマウンドにも立ちました。

このように、生徒数の減少で悩んだ学校行事や部活動、東日本大震災や豪雨による甚大な被害、変わりゆくものも多かったように思いますが、変わらないものもありました。そ

れは、地域や保護者の温かさ、浄法寺の文化・歴史を愛護する気持ち、そして生徒の純粋で明るい表情ではなかったかと思えます。地域に根ざした、本当に素晴らしい学校に勤務できた六年間は、私の誇りです。

浄法寺校に携わった一人の教員として、これからも「浄法寺」の魅力・文化・歴史、そして「浄法寺高校」の存在を語っていくことが使命であり恩返しだと考えています。今後もし生きていく限り、浄法寺の地に脚を運びます。



浄法寺高校の思い出

昭和五十六年度卒業生

外 崎 留美子 (旧姓 山本)



私はスキーをするために浄法寺高校に入学しました。県外の高校へ行きたいという思う気持ちもありましたが、岩手県人としてスキーをするために浄法寺高校に進む事にしました。

高校一年生の時は、スキー部の先輩も何人か在籍していたと思いますが、あまり一緒にトレーニングした記憶がありません。それでも県大会ではスキー部の一員として先輩と共に出場しました。しかし、インターハイでは一人だけで出場し、その頃から一人で大会出

場することが多くなりました。一年生の時は、インターハイ・国体等の大きな大会以外はワックスを塗るのも自分自身、全て一人で行動しなければならず、大変でした。

二年生になってからは先輩も入り一人ではありませんでしたが、自分自身でどんな練習をするのかを考え、先輩と一緒にトレーニングをしました。インターハイ・国体では前年のように一人の出場ではなく、先輩と一緒に出場し、ワックスをしてくれるコーチもいたので、私自身前年度よりも気持ちにゆとりを持たれたことにより、一つ一つの大会に集中することが出来ました。その結果、入賞・優勝と良い成績を残す事が出来ました。

高校最後の年でもある三年生では、スキー部三人で日々練習を行いました。個人以外に団体競技でもあるリレーに出場するために、他の部活動をしている人を助っ人として借り、県大会前までにスキー部に所属してもらい、大会に出場しました。インターハイのリレー出場枠は、二つ“あり、その枠に当てはまりインターハイでのリレー出場の切符を手にすることが出来ました。私自身最後のインターハイだったので、個人競技以外に団体競技のリレーでも入賞したいと思い、部員全員そして助っ人と協力・努力しあった結果、入賞す

ることができ、良い思い出になっています。部活動に明け暮れていたのが私の高校の思い出で、良い思い出も数多くありますが、一つとても残念な思い出があります。それは、ジュニア世界大会と重なり、同級生と一緒に卒業式に出席出来なかつた事です。卒業式は残念な思い出もありますが、インターハイ三年間入賞、国体入賞・優勝、三年生でジュニア世界選手権出場出来たことは今でもいい思い出です。



浄法寺高校の思い出

昭和五十八年度卒業生

昭和六十三年十月〜平成十八年三月在職

現岩手県立山田高等学校教諭

小田島 哲 男



昭和六十三年十月、当時指導者であった北館敬男氏が国体の強化合宿中に急死し、母校の指導者として声をかけていただきました。その年に事務室の事務補助をしながら指導にあたりました。平成元年四月から、講師として母校の教壇に立つことになりましたが、当時は教員という仕事がどのようなものかも全く知らず、当時の校長先生から多くの先生方には、いろいろご迷惑をかけながら指導していただき大変勉強になりました。

相撲部の指導は、平成元年からコーチとして姉帯恵一氏と二人で指導にあたりましたが、姉帯さんには、生徒の憎まれ役になってもらい大変申し訳なかったと思います。練習は、最初自分の出身大学の練習メニューを課しました。当時三年生には、加藤紀彦氏（山田町役場）、阿部稔氏（JAいわて）、蒲野喜浩氏（介護老健施設さくら山）、二年生に谷地仁氏（二十山親方）、鳥井本豊氏、木村真記氏、山口徹氏。一年生の泉山雅行氏（三研ソイル）、松崎宏幸氏（旧姓大向）は共に田子町上郷中出身、舩田克己氏（社会福祉法人親和会望みの園はまなす）、中野智氏（自営）は三戸中出身でしたが、声をかけてもらっていた指導者が急死して不安になっていたところを再度相撲部後援会の方々と勧誘に行き、説得して、入学してもらった事も今では良い思い出です。入学後の県高校総体では、一年生の舩田氏を使って挑み優勝をしました。東北選手権が本県山田町で開催され、団体で三位に入賞できたことも思い出されます。この大会で活躍した蒲野氏が山田町での就職を内定させた事は、私自身「こんなこともあるんだ。」という思いと、ここまですべて考えてくれる関係者がいることに感謝しました。この年、県高校総体、県民体育大会、県新人大会で優勝。

平成二年の東北総体（ミニ国体）では個人戦決勝において、三年生谷地氏と二年生泉山氏という対戦もありました。結果は、一位谷地氏、二位泉山氏でした。この年も県内三大会優勝。翌年の二月に行われた全国選抜弘前大会で団体戦初めて決勝トーナメント進出して三位入賞を果たしました。

前年の実績をもとに平成三年も県内三大会の連勝を狙いましたが、県高校総体で泉山・舩田両氏を擁しても優勝できませんでした。この大会は勝負の厳しさを知る機会となりました。しかし、この年の国民体育大会（石川県）の少年の部は、浄法寺高校三名（先鋒・舩田氏、大将・泉山氏、選手・小野寺学氏）・平館高校一名（中堅・山屋氏）で構成され、合宿するごとに強くなり私達成年チームも真剣勝負しないと負けるような状態でした。そして、初めて準優勝を成し遂げたことに感動したことを覚えています。

平成五年には、全国高校総体と全国選抜十和田大会で団体三位に入賞することができ実力を発揮できるようになってきました。

また、今だから話せることとして、盛岡で東日本選抜大会が数年開催されましたが、浄法寺高校はこれまで一回も予選を通過したことがありませんでした。この年主力を外して

メンバーを決めて出場したのです。そのメンバーも参加したい選手を集めて選考会をしたり、出場順位もジャンケンで決めて出たりした結果、団体三位入賞してしまったこともあります。

平成七年は、実質五名しかいない中、県内大会に参加して連勝記録を積み重ねました。県民体育大会は地元浄法寺町で開催されました。五人制の団体戦に越田正信氏（現平館高校教諭）、蛇口吉男氏（浄安森林組合）、前川健志氏（ヤマト運輸）、富野豊氏、石井友美氏で出場し、越田・蛇口・前川各氏は常に勝つことが要求される中で、一緒に頑張ってきたほかの二名がこの大会では、五対〇と勝てたことなど感動した試合も多かったのですが、最終対戦の平館高校戦で、絶対勝つと思われていた越田氏が敗れ連勝記録も終わるかと思われました。しかし結果は、二対二の大將戦で見事相手を倒し優勝と連勝記録を守れたことで部員全員が感動しました。インターハイでは、越田・蛇口・前川・富野・佐藤（サッカー部員）各氏で出場しましたが、全国大会ですらで特に三人にかかる負担は大きかったと思います。それでもベスト8まで勝ち上がりましたが、周りからは「よく頑張った」と声をかけられたこともありました。この三人と平

館高校の一人で国体に出場して三位に入賞したことも思い出です。

平成十一年の東北選抜大会で田澤和麻氏が個人選手権で優勝して、オールジャパンのメンバーに選ばれてハワイ遠征に同行したことや平成十二年の岐阜インターハイで田澤氏が個人で三位入賞したことも良い思い出です。

平成十七年の東北選手権で五十嵐敦氏（盛岡市役所）が百十五kg以上級で優勝。谷地勇氏（谷地林業）の優勝。斉藤誠氏（自営）軽量級優勝などここにあげることができなかった選手も多かったです。

しかし、私がこうして書くことができるのは、私を信じてついてきてくれた選手や保護者、後援会の方々、強い者、弱い者関係なく一緒に苦労を共にしてきた仲間達がいたからです。これらの方々に感謝するとともに、周りから支えてくださった方々に感謝を申し上げます。また、東日本大震災の時には、いろいろ支援していただきこの場を借りて感謝とお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。



浄法寺高校

相撲部の思い出

平成二年度卒業生
元小結栃乃花 現二十山親方

谷 地 仁



私は、高校に入学して初めて相撲部の本格的な稽古に圧倒されました。その稽古が自分の中で思っていた相撲の稽古とは全く違うものだったからです。最初はこの部活動を続けられるだろうかと不安の気持ちで入部したのを覚えています。

私が、学区の違う浄法寺高校を進学先に選んだのは、中学時から相撲部の監督の勧誘もあり、県内でも強豪であった相撲部に入るためでした。ほとんどの先輩達や同級生は中学校時代に相撲部に所属していたため、経験もあり、それぞれが自分の型を持っていました。稽古ではそんな部員達に挑んで行くのですが、

私はほとんど跳ね返されてばかりでした。相撲部での稽古は基本的な四股・すり足・ぶつかり稽古の繰り返しでした。慣れない稽古でしたが、この毎日の基本的な稽古のおかげで、大相撲の世界に入ってから稽古に苦勞することなく馴染むことができたと思っています。

そして、入部して間もない一年生のとき、県内、東北、全国大会に出場させていただき、全国のレベルなどを身を以て体験することができました。特に一年次のインターハイでは団体戦に出場させてもらいましたが全く歯も立たず、同じ一年生の生徒とも対戦しましたが、何も出来ず力の差を体感しました。それからはまずは体力作りです。対戦相手とあつても押し負けない、組んでも力負けしない身体作りをしました。高校では、町の下宿先に寝泊まりして高校に通っていましたので、下宿先のご家族にはご迷惑をおかけしましたが、ご理解もあり大変お世話になりました。食事面では、栄養バランスを考えてもらい、量も沢山作っていただいて、私自身三年間で百二十五kgになり、入学時より三十kg以上も体重が増えました。そのかいもあり二年、三年次には全国大会でも勝てるようになり、成績も残せるようになりました。

高校では、周りの同級生、相撲部の先輩後輩、監督や学校の校長先生始め大勢の先生方にお世話になりながら高校生活を過ごして行くことが出来ました。相撲部の稽古・合宿・遠征試合などで学校の授業や行事には参加出

来ないことも多々ありましたが、先生方や同級生の皆に助けられました。相撲部のOBの皆さんや浄法寺町の皆様は相撲に対して関心も大きく、町で相撲大会などがあつた時は大きい声援をいただきとても力になったことを思い出します。

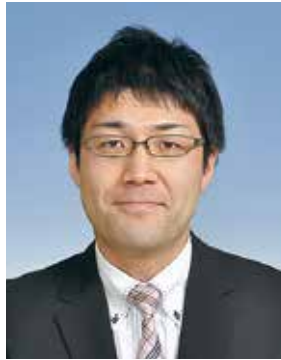
浄法寺高校の名前は無くなる訳ですが、高校での三年間で高校の先生方や、相撲部の関係者、浄法寺町の街の方々にお世話になったことが私自身、大学・大相撲に進んだ時にとっても役立ちました。高校生活が私の核を作っていたのだと思います。私はこれから自分は「浄法寺高校を卒業した」と胸を張って言っていきます。



母校に思いを馳せて

平成十三年度卒業生
平成十八〜二十五年在職
現岩手県立盛岡農業高等学校教諭

鈴木裕介（旧姓三角）



私が浄法寺高校を卒業して十四年の月日が流れました。少子化の煽りとはいえ、こんなにも早く我が母校が閉校を迎えるのは信じられない気持ちです。

私が浄法寺高校に入学したのは平成十一年、当時は全校百五十名程の生徒が在籍していたように記憶しています。伝統と実績ある相撲部で活躍したいと思い入学しました。高校時代の記憶と言えば、やはり相撲のことが一番に思い出されます。日々の厳しい稽古に、何度となく挫折しそうになりました。骨折や靭帯断裂など怪我に苦しんだ三年間でもあり

ました。一方で、岩手インターハイや国民体育大会、二年次には相撲部でハワイ遠征を経験させていただきました。ハワイ州知事を訪問し、第六十七代横綱武蔵丸関の母校で相撲を披露、ハワイのラジオ番組にも出演するなど、他では得られない貴重な経験しました。そして、私が在学していた頃は、相撲部の大先輩である栃乃花関（現二十山親方）が小結に昇進し大活躍した時期でもありました。

高校卒業後大学へ進学し、その後は教員として浄法寺高校に勤務しました。初日は高校時代にタイムスリップしたかのように懐かしさを感じたことを、今でも覚えています。しかし、その時には既に再編の話が進んでおりました。それから八年間母校に勤務する中で、募集定員減、浄法寺高校から福岡高校浄法寺校への分校化、そして募集停止を経験。非常に残念なことではありますが、母校の節目に立ち会うことができ光栄に思います。また、母校で働くことによって、改めて同窓生や地域の方々からの支えが如何に大きかったのか気付くことができました。大変感謝いたしております。

私事ではありますが、現在は岩手県の教員採用試験に合格し盛岡農業高校で教鞭をとっておりますが、合格するまでには長い年月を要しました。「努力を怠らず、諦めずにチャレンジし続ける」、これは浄法寺高校の校是でも

ある“自彊不息”の精神だと思います。浄法寺高校で培ったこの精神があったからこそ、目標を達成することができたのだと感謝しています。浄法寺高校・浄法寺校は閉校となつてしまいましたが、全国各地でこの精神を持った同窓生が活躍し続けることを願っています。



学生の本分は…

平成二十年度卒業生

田 口 頌 悟



卒業後も浄法寺校の情報は市の広報や人でで耳にしていた。しかし、閉校記念誌を依頼され、原稿をパソコンに打ち始め、ようやく実感が湧いてきた。「母校がなくなるのか」と。

まず、私が三年時に福岡高等学校浄法寺校となった。厳密に言えばその時点で呼び名は「浄高」ではないらしい。リアルタイムで分校化の変わり目に居たが、自分は「浄高」という呼び名が好きである。

さて、ここからは自分の浄高への思いと思い出を書かせていただく。

自分は大学へ進学したのだが、大学や職場の友人との会話には「自分達の高校時代の話」

がよくでてくる。私と同年代の方々は経験しているのではないだろうか。他校出身者へ同級生の人数を話すと笑われ、驚かれる事を。

大学時代の友人からは「高校の同級生が東大に入学した。」「プロ野球選手になった。」などという話をよく聞いた。自分の知る限り、高校時代の友人にそういった人物は居ない。

しかし、そんな浄高だが自分は凄く好きであった。同級生の家の場所はだいたい知っている。友達の両親を飛び越し、おじいさんおばあさんまで知っている。部員の少ない部活、幼い頃より共に育った仲間と本気で野球に励んだ。休みの日ともなれば年齢も関係なく、川や山、自転車一台でどこまでも行った。浄法寺町という小さな町の高校だが、小さいからこそ温かい。そんな浄高、仲間が誇らしかった。

「高校時代を振り返ると？」と問われると何かを考えた。学生の本分は「学業」などという言葉をよく聞く。自分はその通りだと感じる。しかし、少なからず自分のメインではない。朝に通学し夕方まで約五十分間の授業を六回繰り返し、約五時間も座り続け話を聞いているのである。今思えば一種の修行とも思える。これでは否が応でも本分は学業にならざるを得ない。ただ、いくら当時に思い出しても「学業」の記憶があまりにも薄い。ということ、自分の思い出は「学業」ではないことに気づ

いた。ただ、暇つぶしをする為に教員と駆け引きをしていた事は鮮明に覚えているのだが。

では何か。やはり、野球であった。よく大会でパンフレットを配布されるのだが、名簿の出身中学校名を見ると上から下まで「浄法寺中学校」なのである。幼い頃から共に野球をしてきたメンバーと高校でも野球ができる。

これ以上の喜びはなかった。一緒に野球をできた事が嬉しかった。野球には勝敗がつきものである。全員で勝利にこだわった。そうすればチーム内で温度差が生まれることもあった。失った仲間もいた。しかし、残された仲間とこれからをどうするか真剣に話し合った。そして真剣に取り組んだ。少しではあるが結果もついてきた。あの勝利した喜びは何にも変えられない。全てが皆と野球を楽しむ為のアクセントとなった。

さて、結びとなるが、今年度で閉校になり「母校」がない事に一抹の寂しさを感じている。できるのであれば「OB」として野球応援等もしたかった。しかし、自分達が過ごした「浄高」での三年間は本物であり、変わる事はない。当時の先生方、地域の方々、仲間、そして三年間通わせてくれた両親に感謝を伝えたい。ありがとう。

小さな高校に

あふれる思い出

平成二十一年度卒業生

安ヶ平 美 咲



福岡高校浄法寺校で過ごした三年間。憧れのセーラー服、自然に囲まれた校舎、クラスメイトや先輩も後輩も知っている人ばかり、先生方もフレンドリーで礼儀知らずの私たちをやさしく見守ってくださいました。二年生の時に福岡高校と統合し、後輩は制服も変わり、少し寂しい気持ちになったのを覚えていますが、相変わらず穏やかな環境の中でのびのびと毎日を過ごしていました。

気が付いてみると卒業から早くも五年が経ちましたが、部活動や学校行事は今でも鮮明に思い出されるキラキラとした思い出です。

多くの印象的な出来事がありました。それだけではなく、何でもない毎日も、くだらないことで毎日たくさん笑ってすごくおもしろかったです。

しかし、そんな穏やかな毎日を送っていた私ですが、三年生では人生最大の危機感を覚えていました。進路について。進学校ではないし：と、正直すごく不安でした。そんな私に先生方は付きっきりで勉強や面接練習、小論文の添削と忙しいなかご指導くださって、受験直前の面接練習では、「もしあなたを入学させないような学校なら見る目がない。自信を持って。」なんて言葉で勇気づけていただいたのをよく覚えています。そんな風に一人一人濃い指導をしていただけなのは小さい学校ならではのだと思います。

今でも友人と会うと、高校で過ごした毎日をついこの間のことのように思い出します。きつとこれからも、何年後も鮮明に思い出することができるとしよう。母校が無くなってしまうというのはとても寂しいことですが、わたしたちが福岡高校浄法寺校で過ごした時間が無くなるわけではありません。これからも思い出として大切にしていきたいです。

